

## ピーピー鳴るよ！（ピーピー豆、ピーピー茎、ピーピー葉っぱ） 常磐会短期大学附属泉丘幼稚園（大阪府堺市）

### 事例1 ピーピー豆（カラスノエンドウ）ピーピー茎（タンポポ）

散歩を通して「科学する心」を育もうと願い散歩を繰り返す中で、遊びは少しずつ変化していった。  
中でもカラスノエンドウに興味を示し、豆を取り出して遊ぶ姿が見られるようになる。5月中旬

S児は「カラスノエンドウな“ピーピー豆”って言うねんて。お母さん言ってた」と、笛のように鳴ることを説明しやってみる。しかし鳴らないので、またお母さんに聞くことにする。

S児は母親に聞いてティッシュで豆の中を拭いて、鳴らすことに挑戦する。しかし鳴らない。

S児や保育者の様子から、他の子どもたちも興味をもちやってみるができない。

保育参加として保護者が散歩に参加することで、保護者がいるからこそできること（ピーピー笛の鳴らし方を教えてもらう、シロツメクサの冠を作る、等）を楽しめるようにする。5月下旬

四つ葉や五つ葉のクローバーを見つけたり保護者の知らない草の名前を子どもが教えたり、タンポポの花が綿毛になり飛んでいくという3回の変身を保護者に話したりするなど、見つけた草花を見ながら、今までの散歩で楽しんできた知識や発見を楽しむ会話がある。

S児はピーピー豆を鳴らそうと張り切って探す。見つけて鳴らそうと苦戦する。「ピー」と鳴り、その音で子どもも大人も驚き大騒ぎになる。S児の母親が鳴らしたことが分かり、周囲の親子が教わる。太っているエンドウがよいこと、豆の皮の中の水分を拭くといいいことなど保護者は保護者同士教え合い、子どもはS児中心に子ども同士で工夫する姿が見られるようになる。カラスノエンドウがなかなか見つからなくなると、R児の母親がタンポポの茎でも音が出ることを話し、挑戦する。太い茎がよいこと、拭く時は口の部分を押さえたほうが鳴りやすいことなど教わり挑戦する。タンポポの茎は鳴らしやすいと気付く。



### 事例2 ピーピー葉っぱ（ニセアカシア）

カラスノエンドウやタンポポを鳴らすことに挑戦したが、なかなか鳴らせない子どもがいた。6月上旬  
5歳児だけで散歩に行く。目的地まで歩く途中の緑道で、保育者がニセアカシアの葉を鳴らして見せる。

ニセアカシアの葉を使って保育者が鳴らしたことから、「ピーピー葉っぱ」と言い早速挑戦する。すぐに鳴る子どもがいるが、なかなか鳴らない子どももいる。保育者に「あのね、先生の秘密の方法よ。口をペロペロってなめてから鳴らしてごらん」とコツを教わると鳴る。嬉しそうに何度も鳴らす。



3、4、5歳児のかかわりの場面が引き出される。

5歳児が途中何度も止まり、ピーピー葉っぱを探す。

5歳児が「“ピーピー”よく鳴る！！」「わたしも鳴るようになったよ！」と話していると、4歳児F児が「ぼくもしてみたい」と言う。5歳児「ピーピー葉っぱ、ここにあるよ」「こうして鳴らすねん」と教えるが、4歳児F児は「鳴らない・・・」とくりかえし鳴らそうと挑戦する。

4歳児F児は園で担任に、ピーピー葉っぱのことや5歳児は鳴るけど自分ではできないことを話す。担任に「もう一度やってごらん」と促され、鳴らそうとした時に担任から葉っぱを口元で押さえる援助を受けたことで「ピー」と鳴り、喜ぶ。その後、鳴らせるようになる。

5歳児は、幼稚園の山で葉っぱをとってきては、鳴らしている。その様子に3歳児も興味をもつ。3歳児が「先生、あの葉っぱ欲しい。どこにあるの？」と言うと、保育者が「年長さんが知ってるよ。教えてもらってごらん？」と促され、3歳児は5歳児に「この葉っぱ、どこにあるの？」と言う。5歳児は「教えてあげる。おいで（手をつないで山に行く）ここにあるよ」と教える。3歳児は葉っぱを取って鳴らしてみようが、なかなか鳴らない。5歳児は「あのね、こうして葉っぱを口につけて、お母さん指とお兄さん指で押さえるねんよ（やって見せる）」3歳児はまねようと何度くり返しても鳴らない。「うー、ぶー」「えっ？鳴った？！でも、音が違う」よく見ると葉っぱを手で押さえ声を出したり、鼻に葉っぱを当てて「うー・・・」「鳴れへんなぁ・・・」と鳴らす努力はしている。鳴らすことができた子どもは2～3人で、鳴らないと諦め、他の遊びに移った子どももいる。

### みどころ

実や茎や葉を使って「笛」のように鳴らす遊びに繰り返し挑戦している様子から、この後もできなかった茎や実にも挑戦したり他にもあるのではないかと探ったりする展開が期待できます。幼児なので、鳴る仕組みや鳴らし方の工夫や追求が、言葉や動きに表れることが限られていて、考えていることは明確には表れません。しかし、他の植物とは区別をし、教わった「コツ」や技術を獲得しようと繰り返し挑戦している姿から、自分なりに考えて、鳴りやすく扱いやすいものを探したり、持ち方や吹き方を工夫したりしていると思われます。また、知っていることやまねようとするを言葉や動きで表し、教えたり教わったりする経験の中でも、科学する心が育まれています。